

明治期の道頓堀と劇場

—— 弁天座の建設をめぐる ——

はじめに

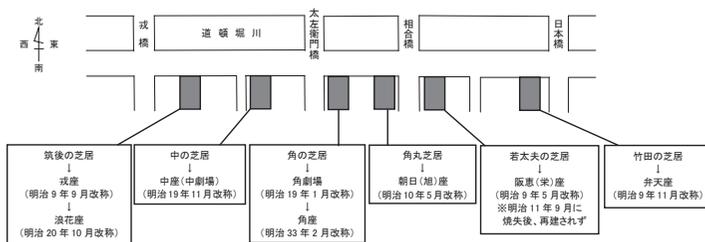
江戸時代、芝居町として発展した大坂の道頓堀は、明治期以降も興行が行なわれ、多くの人びとで賑わった。明治元年（一八六八）の時点で、道頓堀川の南側には西から、筑後の芝居、中の芝居、角の芝居、若太夫の芝居、竹田の芝居の五つの劇場が興行していた。その後、休止していた角丸の芝居が、明治十年（一八七七）五月に朝日座と改称して新築開場し、六つの劇場が道頓堀に軒を連ねることになった（図1）。

道頓堀は、江戸時代はもとより、明治期以降もたびたび火災に遭い、劇場は焼失と再建を繰り返した。火事の後に廃れた劇場もあり、若太夫の芝居から改称した阪恵座は、明治十一年（一八七八）に焼失した後、再び開場されることはなかった。

特に竹田の芝居は、明治九年（一八七六）一月の火災で焼失し、新築落成した同年四月に劇場から出火して再び焼失した。さらに、弁天座と改称した後も、明治二十七年（一八九四）五月に火事で全焼し、十月に再建されている。

弁天座については、これまで、高谷伸氏の『明治演劇史伝（上方篇^①）』や堂本寒星氏の『増補改訂上方演劇史^②』などで触れられており、同劇場の座主である尼野氏については、木村錦花氏の『興行師の世界^③』などで紹介されている。さらに『近代歌舞伎年表 大阪篇^④』に、弁天座で上演された演目とともに、劇場の焼失や再建の時期についても記されている。しかしながら、当時の弁天座の再建や改築の実態については、明らかになっていない点も多い。

関西大学なにわ大阪研究センターには、「大阪の劇場大工 中村儀



(図1) 明治期の道頓堀の劇場

(「大阪市劇場史略図—近代歌舞伎年表 大阪篇 第9巻付録一」
 【国立劇場近代歌舞伎年表編纂室編『近代歌舞伎年表 大阪篇 第9巻
 〔別冊〕』八木書店、1995年]をもとに作成)

藤岡真衣

右衛門資料^⑤（四五五点）以下、「中村儀右衛門資料」と略す）が所蔵され、そのなかには、明治二十七年の弁天座の新築工事に関わる資料が残っている。

『近代歌舞伎年表 大阪篇』の記述を除いては、弁天座の建設工事の経緯に関するこれまでの調査・研究は、必ずしも十分とは言えない。本稿では、弁天座の明治二十七年の新築工事に加えて、二十三年（一八九〇）の改築工事に着目し、当時の新聞記事や「中村儀右衛門資料」などを用いて、それらの工事の実態について考察したい。

一 竹田の芝居から弁天座へ

弁天座の前身である竹田の芝居は、江戸時代から道頓堀にあった劇場である。『撰津名所図会』（巻之四、寛政十年（一七九八）刊）には、「竹田近江が機振戯場は諸国までも聞て其名高し」と記され、「東西辺鄙の旅人も竹田唐操を見ねバ大坂へ来りし験なしとぞ聞へし」ともいわれるほどであり、竹田の芝居を見物するオランダ人たちの姿を描いた「竹田近江機振戯場」と題する挿画も紹介されている。さらに、『浪華の賑ひ』（二篇、安政二年（一八五五）刊）に「今浄留理或ハ哥舞妓等興行して定ることなし」とあることから、江戸時代末期には、人形浄瑠璃や歌舞伎が上演されていたようである。その後、明治元年の時点では、歌舞伎を興行していた。

明治九年（一八七六）一月八日、道頓堀の若太夫の芝居から出火した火事で全焼した竹田の芝居は、同年四月に新築開場したが、まもない同年八月十八日、劇場内で火事が発生して再び焼失した^⑦。そして、同年十一月

には、竹田の芝居から弁天座と改称して開場した。

同劇場の持ち主については、のちの資料になるが、『大阪毎日新聞』（明治二十七年五月七日付）によると、「明治九年四月中今の座主尼野吉郎兵衛^⑧が買取りて後更に弁天座と改称したりと云ふ」とあり、少なくとも明治九年四月の時点で、劇場は尼野吉郎兵衛の所有になっていたようである^⑨。

尼野吉郎兵衛が座主であった明治二十八年までの間に、弁天座は二度の工事が行なわれており、その最初が明治二十三年（一八九〇）五月の改築であった。その経過をつきにみてみたい。

二 明治二十三年の改築工事

弁天座の改築の計画については、明治二十二年（一八八九）十二月三十一日に発行された『大阪毎日新聞』につきのように記されている。

道頓堀の弁天座は今回東京の歌舞伎座に模し改築するの見込にて同座主なる同区御蔵前町天野吉兵衛氏は実地検分の為め此程大工を東上せしめしよし

これによれば、座主である天野吉兵衛（尼野吉郎兵衛）は、東京の歌舞伎座を参考にして弁天座を改築する予定であったことがわかり、実地検分のために大工を東京へ派遣した。さらに『大阪毎日新聞』（明治二十三年一月七日付）に、改築する弁天座の構造やその規模が具体的に書かれている。

道頓堀弁天座の座主天野吉郎兵衛氏は兼て同座を改築せん事を思立ち其構造を東京の歌舞伎座に模倣する筈にて先頃上京なし右歌舞伎座の構造に倣ふて改築の設計を定め此両三日前帰阪なせしが其設計の模様は間口拾間（旧は八間）奥行廿二間の三階建てとし入場人員は凡そ三千人乃至四千人位迄とし建築の上部は残らず鉄材を用る屋根は亜鉛を以て葺き来る廿日頃より其工事に着手し五月中迄には竣工せしむる都合なりと

改築する弁天座の参考となつた歌舞伎座は、演劇改良会^⑨に参加した福地源一郎（桜痴）（一八四一〜一九〇六）^⑩が、演劇改良の理想を実現するために、明治二十二年（一八八九）十一月、東京の木挽町（現銀座四丁目）に建設した劇場であつた。歌舞伎座を設計したのは建築家の高原弘造で、その構造は木造三階造りの塗家とし、屋根は棧瓦葺と亜鉛引き鉄板葺であつた^⑪。外観は洋風、内部は和風で、間口十五間、奥行三十間、観客数は三千人余りを収容できるように設計された^⑫。また、幕間ごとに観客が休憩する運動場を設置しているほか、劇場の上部と床下には、場内の空気を常に新鮮に保てるように空気抜きがつくられるなど、衛生面にも配慮した構造であつた。

つまり、尼野吉郎兵衛は、歌舞伎座ができて間もないうちに、大工に同座の実地検分をさせたことになる。

この歌舞伎座を参考にした弁天座の設計は、改築前の建物よりも間口を広げ、三階建とし、三千人から四千人の観客を収容する予定であつた。また、建築の上部には鉄材を用い、屋根は亜鉛葺とする計画で、明治二十

三年（一八九〇）五月中に完成することをめどとして、工事が一月二十日頃から始まつた。

その後、改築の開場式が行なわれたのは明治二十三年五月八日のことであり、その様子を、『大阪毎日新聞』（明治二十三年五月十日付）がつぎのように伝えている。

同座は今回改築して構造一層美麗なるが中にも舞台の正面は御殿白木造りにして皮葺の屋根を見せかけ両側の棧敷及び向正面二階三階とも白木の欄干を附け御簾を掲げ殊に衛生上注意を加へ左右に大窓を明け空気の流通を計りしは頗る改良の実効見えたり

さらに、『大阪毎日新聞』（明治二十三年五月十七日付）に弁天座の劇評が掲載され、そのなかにも新しい劇場について記されている。

当座は東京の何座にか模せしもの、やう聞きたれども、評者の見たる所にては、京都の祇園座と当地の角中浪華の諸座を折衷せるもの、如く、中芝居としては頗る美麗なり、殊に空気の流通に意を用ゐて、天井をあくまで高くし、其他の構造にも念を入たれば、衛生の点はや、申分無きもの、如し、只肝腎なる舞台の奥行き狭くして、道具の粧飾^{かざりつけ}に不自由を感じる如き、地面の狭きが為とは云ひながら、他に比して一の欠所と云ふべきか

この記事から、東京の劇場（歌舞伎座）を参考にして建てられたが、

実際の弁天座は、京都の祇園座と道頓堀の角座・中座・浪花座を折衷したような構造であったようである。空気の流通を図るなど、衛生面を改良した点は、東京の歌舞伎座を参考にすることが推測できる。その一方で、劇場の欠点として、土地の面積が狭いため、舞台の奥行も狭くなり、道具の飾り付けに問題があったことも記されている。

また、開場後に尼野吉郎兵衛が出した「大入御礼」の新聞広告にも、構造は堅牢なる上空気の流通を専らとし従前不完全なる処は悉皆改良なしたれば夏季は殊更衛生上無害の一大劇場にして尚亦今度出勤の俳優一統はじめ楽屋其他の者に至るまで未だ一人の欠勤も無之頗る勉励仕候

とあり、劇場の安全面や衛生面が改良されたことが強調されている。

明治期以降、劇場にとって衛生面の対策は大きな課題であり、特に大阪では、コレラなどの伝染病が流行すると、人が集まる劇場は興行差し止めになることが多かった^⑮。劇場に関する法令である「劇場取締規則」(明治十五年に制定後、改定を重ねた)にも、場内の空気の流通をよくすることなどが義務付けられていた^⑯。

このことから、弁天座の場合も、劇場内の空気の流通を図るなど、衛生面に配慮した構造に改築されていたことが考えられる。

ところが、この弁天座は、惜しくも明治二十七年(一八九四)五月六日に劇場内から出火して全焼し、その周辺の人家までも延焼させる事態となった。『大阪朝日新聞』(明治二十七年五月八日付)によると、

一昨六日午前三時南区東櫓町の劇場弁天座(持主尼野吉良兵衛)より火を失し同座全焼して其周囲の人家を撫廻し猶向ひ側へも延焼し全焼二十七戸(内劇場一箇所寄席一箇所)半焼十三戸にて同五時三十分鎮火せり此日は幸ひに風なかりしも何が芝居小屋とて凄まじき火勢にて同座の棟落たる頃の火は遠く大川近辺の火の見櫓に立たる人の顔を照して眉目明かに見えたる程なりき(略)弁天座は元竹田の芝居といひしを明治九年四月に今の尼野吉良兵衛の手に買取り竹田を改めて弁天座と称し興行し居り同二十三年劇場建築規則に依り三階造りの改良建築になし道頓堀第一等といふ程立派に堅牢に建あげ同年四月より開場して一昨六日まで五箇年目満四箇年なり

とあり、明治二十三年五月に改築された弁天座が、堅牢で評判の高い劇場であったことがわかるが、その一方で防火対策は十分でなかったようである。

その後、焼失した弁天座が、どのようにして再建されたのかをつぎにみてみたい。

三 明治二十七年に新築開場した弁天座

明治二十七年(一八九四)五月六日に焼失した弁天座の再建計画については、『大阪毎日新聞』(明治二十七年五月八日付)によると、「同座は一週間内に地ならしを終へ直に建築に着手する都合なるよし」と記され、すぐに建設の準備が進められた。その一方で、劇場の左右と後ろに煉瓦

塀を築き、左右に三間ずつの空地を設けるなど、防火対策を講じることが条件になった。¹⁷⁾

焼失から四日後の五月十日には、大阪保険会社（大阪保険株式会社）から弁天座へ五千元、類焼した一戸へ三百円、半焼した建物に五十円の合計五千三百五十円が支払われ、その後、弁天座の座主尼野吉郎兵衛は、各新聞社に「弁天座広告」を出し、劇場の再築と大阪保険株式会社への謝意を公表した。¹⁸⁾

さらに、劇場再建の様子を知ることがりとなるのが、『歌舞伎新報』一五七八号（歌舞伎新報社、明治二十七年五月二十九日発行）の「京都劇信」の記事である。

此中弁天座の焼失に、引つゞき再築の計画行届きその構造ハ春木座の模型をうつつさむと既に同座に改築せし棟梁を呼びよせたりといへり、されど此度は技師の干渉を仰ぎ劇場の左右に運動場を設けまづ二万円以上の資金を投すべき完全なる建築ならねば警察が納まらざる由なるが度々大入つゞきの弁天座なれば座主の尼野吉郎兵衛も二三万の金は操廻すとも振まはしの付かぬは表構への地所にて従前招牌前七間半なりしを此たびは十一間半に取広めるに付ては直隣りの浪花寿しの家屋を取込まねばならず然すれば先づ道頓堀方一等の劇場とはなるべけれど地所買上げの談判纏まらざるとかにて詰り痛し痒しといふ思入れタツブリの辛抱狂言、拙も今年中に幕は明くまじとの事

再建される弁天座の構造については、春木座を参考にするため、同座の改築に関わった棟梁を呼び寄せたようである。また、技師の干渉のもと、運動場を劇場の左右に設置することなどが、弁天座再建の条件であったという。

「春木座」²⁰⁾とは、明治二十四年（一八九一）十二月に東京の本郷春木町に開場した洋風建築の劇場の春木座を示していると考えられる。

その一方で、再建する弁天座の表構えの土地を拡張する計画があり、劇場に隣接する店舗を取り込まなければならぬなど、土地の買い上げをめぐる問題もあつたようである。なお、この問題は、弁天座の東隣りにあつた寿司屋と座主尼野吉郎兵衛が所有する貸家四軒を取り崩して地面を拡げること²¹⁾で解決した。

弁天座が焼失した翌月には、再建の工事が本格的に始動したことを、『大阪朝日新聞』（明治二十七年六月十五日付）の記事がつぎのように伝えている。

本火事のあらびにあはれ一宵の廻り舞台高堂変じて無惨の焼土と化したりし弁天座は予て新築出願中なりしが愈よ一昨十三日の日附にて建築を許可せられ昨十四日座主尼野吉郎兵衛を南警察署へ呼出して其の指令を下げ渡されたり依りて昨日より俄かに職工の人員を増して賑はしく職事を始めたが今其の設計の模様を聞くに従前の地面三百零七坪なりしを更に六十九坪を加へ表口十七間奥行二十三間総坪三百七十六坪となし棟上りも猶ほ五尺を増して五十三尺の御殿造りに改め在来の丑鉛葺は兎角雨音の烈しき為め音楽舞詞を妨ぐる

事あれば今度は悉とく瓦葺になす事とす木材は物梅造りにて天井は蠟色椽の杵を取り其の中は残らず縹珍張とし棧敷の力柱は鉄にして之を朱塗となし場は二間の合間に八寸幅の通路を設くまた場の下も棧敷の下も惣漆喰にして床下に一尺五寸づゝの空気抜きを設け専ら見物の健康を保つ事とし表三階の上部は運動場とし高津生玉天王寺より市中沓田を一眸中にをさめ遠くは木津川天保山を眺むる事とす此の建坪二百八十五坪にして東西三間づゝの空地へは四季の草木を栽込み便所は舞台の西手へ廻して此の火除運動場より少しも見えぬやうにするといふ又東西に高さ十八尺の防火壁をめぐらし楽屋の後部は残らず土蔵造りとして専ら火災を避くる計画なりとぞ座主は是非とも九月までには落成さするとて非常に工事を取急ぎ居るよしなり

この記事によると、弁天座新築の出願は六月十三日付で許可され、翌十四日に座主の尼野吉郎兵衛が南警察署に赴いて建築許可の指令を受けた後、早速、職人の人数を増やして工事が進められた。劇場の設計は、間口十七間、奥行二十三間、総坪数三七六坪、建坪数二八五坪で、その構造は、瓦葺の御殿造りの建物であった。

建築の木材には梅を用いることが考えられていた。天井については、「蠟色椽の杵を取り其の中は残らず縹珍張とし」とあることから、ふちを蠟色塗にし、その杵の中に縹珍（縹子の地に数種の色糸で文様を織り出した織物）を張ることとし、和風の要素を取り入れながら、棧敷の柱に鉄材を用いるなど堅牢な構造にする計画であったことがわかる。劇場の

床下には「空気抜き」を設けて場内の換気を図るなど、衛生面にも配慮した設計にすることが考えられていたようである。また、三階からは大阪市中の景色を一望できるような構造にすることとした。特に注目すべきは、劇場の東西に三間ずつの空地をつくって火除運動場とし、さらに高さ十八尺の防火壁を設け、楽屋の後部は土蔵造りにするなど、十分な防火対策を講じていたことである。

ところで、この新築工事には、座主の尼野吉郎兵衛の養子であった尼野源二郎（一八六六～一九二〇）が協力していた。源二郎は、大和国十津川村の瀧本家に生まれ、明治二十四年（一八九二）八月、尼野吉郎兵衛の養子となり、長女民子と結婚した。二十五年三月には、大阪黄銅株式会社支配人に就いたが間もなく辞任し、それ以後、父吉郎兵衛を補佐して弁天座の経営に加わった。

この弁天座の新築工事の際には、源二郎が故郷の十津川から材木を取り寄せ、毎日建築現場へ出て工事を監督したという。

弁天座の再建工事は、明治二十七年九月十九日にはほぼ完成し、十月六日に落成届が南区役所に提出された。開場式は、十月十一日に行なわれ、「劇場の構造は従前のものより一層精密華麗を極め観者の目を驚かしぬ」と、『大阪朝日新聞』（明治二十七年十月十三日付）が伝えている。

さらに、新築の弁天座を描いた錦絵「道頓堀弁天座演劇場之図」（明治二十七年十月印刷・出版、画者兼発行人玉置吉兵衛）（図2）が発行されており、当時の外観を知ることができる。屋根は瓦葺で、上階は外に出て景色を見渡すことができるようになっていた。建物の正面右側に煉瓦塀がみえ、これは再建の計画案にあった防火壁であろう。このほかの



(図2) 「道頓堀弁天座演劇場之図」 早稲田大学坪内博士記念演劇博物館所蔵
(資料番号016-1931)

特徴としては、屋根の上に櫓やぐらがあり、江戸時代の劇場の名残がみられる。^⑧
この櫓の三方には、櫓幕が張りめぐらされている。また、正面中央あたりに縦長の看板が一つ飾られ、上演される演目の場面を描いた絵看板も軒下にくつも掲げられている。劇場の周りには、「尼野君江」「辨天座主」「本家」と記した幟のぼりが立っているほか、提灯や小旗も飾られており、多くの人で賑わう様子を描いている。

その後、劇場が新築落成した翌年の明治二十八年（一八九五）に、吉郎兵衛長男の貴之（一八七六～一九四〇）が家督を相続し、新しい弁天座の座主となった。^⑨

ここまで、明治二十七年に行なわれた弁天座の新築工事の経過をたどってきたが、設計に関わった人物については、資料がほとんどなく、長らく不明であった。しかし、関西大学なわ大阪研究センターが所蔵する「中村儀右衛門資料」のなかに、大工・中村儀右衛門という人物の履歴書および建設の明細書が残っていたことから、儀右衛門がこの新築の弁天座を設計・建設したことが明らかになった。

つぎに、中村儀右衛門の履歴書と経歴について紹介していきたい。

四 大工・中村儀右衛門と弁天座の建設

現在残っている「中村儀右衛門資料」のなかには、履歴書が五冊含まれている。^⑩

五冊の履歴書は、それぞれ「明治卅五年六月」、「明治四十五年六月」、「大正元年九月」、「明治四拾老年九月改又設計者履歴書」と年月の記載が

あるものと、「設計監督者履歴書」と記載のあるものが残っている。いずれも野線入りの用紙を袋綴じにした冊子で、縦書きで記されている。五冊の履歴書のなかには、本文中や欄外に加筆・修正したものもあり、これらは儀右衛門が控えとして保管していたものと考えられる。

これらの履歴書の内容をもとに、儀右衛門の出生から大正二年（一九一三）にかけての足跡をたどることができ、大阪の劇場の設計・建設・修繕に関わった人物であったことがわかる。

中村儀右衛門（一八五二～一九二二）は、大坂の堀江に生まれ、幼名は奈良松といった。十二歳のときに、父のもとで大工の修業を始め、製図法を学んだ。明治五年（一八七二）に父が亡くなると、父の跡目を相続して、儀右衛門と名前を改めた。

その後も大工の修業を積みながら、明治五年から十三年（一八八〇）にかけて、京都・大阪・岡山・熊本・鹿児島で活動し、小学校や病院などの公共の建物、個人の邸宅などを建設した。

さらに、明治十八年（一八八五）から二十四年（一八九一）にかけては、東京を中心として活動し、皇居造営に関わる工事をはじめ、観象台・火薬庫から邸宅にいたるまで、建設にたずさわった建物は多岐にわたる。この間、儀右衛門は、松ヶ崎^{まつがさき}崎萬長^{きつむなが}や瀧大吉^{たきたけきち}など、西洋の建築技術を学んだ建築家の監督の下で、建設の仕事をしており、東京で建築に関わる人脈を広げていったようである。

明治二十三年九月から二十四年四月にかけて東京の柳盛座の建設に関わった後は、大阪に活動の場を移しており、二十六年（一八九三）一月に千日前の横井座の設計・建設を引き受けたことをきっかけとして、数

多くの劇場の工事を手がけるようになった。

大阪で儀右衛門が関わった劇場としては、道頓堀の弁天座・浪花座・角座、千日前の横井座・常盤座・電気館、梅田の大阪歌舞伎、天満の天満座・老松座、松島八千代座、堀江演舞場、玉造座などが履歴書に記されている。さらに履歴書に記された住所（大阪市南区九郎右衛門町二百五十一番屋敷）から、儀右衛門が道頓堀を拠点として劇場建設の仕事を担当していたことがわかる。

それでは、儀右衛門はいつ頃、弁天座の建設工事にたずさわったのであろうか。「明治四拾壹年九月改メ設計者履歴書」のなかに、つぎのように書かれている。

式拾七年五月市内道頓堀弁天座主尼野吉良兵衛依嘱ニ因リ弁天座ヲ新築設計ヲ為シ尚之レヲ建築ス賞美金壹百円ヲ贈与セラレル此坪数式百四十八坪

これによれば、弁天座の座主の尼野吉郎兵衛が、明治二十七年（一八九四）五月に儀右衛門に劇場の設計・建設を依頼したことになり、劇場が焼失した同じ月に、早くも儀右衛門が仕事を請け負っていたことになる。

五 弁天座の明細書

つぎに、「中村儀右衛門資料」のうち、弁天座の劇場建設に関わる明細

書の概要をみてみたい。明細書は、建設に用いる材料および工賃などを詳細に記載したものである。

「劇場の明細書については三冊残っており、「第壹号 明細書」「弁天座劇場 明細書 第貳号」「弁天座劇場 明細書 第参号」とそれぞれに表題が書かれている。これらの概要と項目をまとめたものが【表】である。三冊の明細書は、いずれも罫線入りの用紙を袋綴じにした冊子である。以下、これらの明細書を紹介していくことにする。

①「第壹号 明細書」

同書は、紙縫^{こぎり}で綴じられた状態で、表紙はなく、裏表紙のみがついている(図3)。裏表紙を除いて、本文の丁数は四十丁である。同書の裏表紙の見返しに「壹号四拾枚」「中村方」とあり、裏表紙に「明治貳拾七年六月 本家 尼野」(図4)と記されていることから、明治二十七年(一八九四)六月に、儀右衛門が使用していたことがうかがえる。一丁表から四十丁裏にかけて、劇場の各所をおよそ六十の項目にわけて、建設に必要な柱・梁・桁などの材質や長さ、数量を細かく記している。本文は、朱書きで加筆修正されている箇所や付箋を貼りつけている部分があるため、設計時に作成されて控えとして保管されていた可能性が高い。

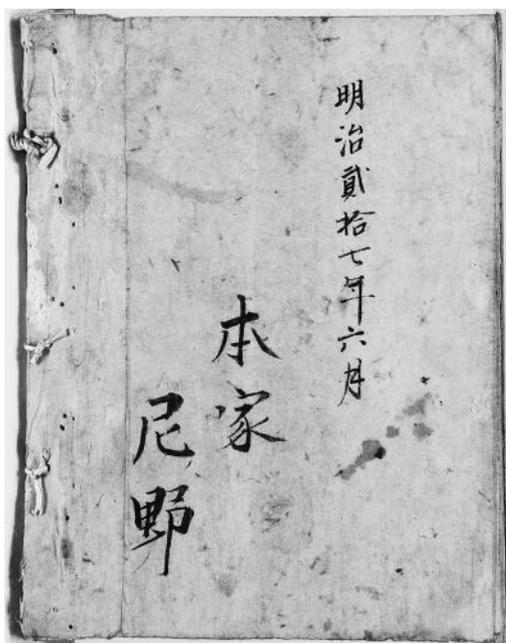
同書の各項目をみると、木材は、梅・檜・松などが多く使われていたことがわかる。また、「鉄柱之部」の項目には、「左右棧敷前側鉄柱」と記されており、劇場の各所にも金属製の材料を多く用いていることから、内部構造を堅牢なものにしようとしていたことが考えられる。さらに、四十丁裏の「屋根瓦之部」の貼り込みに、「舞台屋根瓦」(九十壹坪)、「平

【表】 弁天座の明細書3冊の概要

資料名	寸法(cm) (縦×横)	本文の 丁数	本文の内容 (項目のみ)	記された年月
第壹号 明細書	25.8×19.5	40丁	「弁天座 表廻り柱階下之部」「表二階梁之部」「全表二階上建立柱之部」「表三階梁之部」「表三階柱之部」「表小屋之部」「表三階軒廻之部」「表マキ家根之部」「三階エン下之風窓之部」「三階エン廻り部」「表三階縁側テスリ縁無目廻り部」「正面下割場床并■(役カ)場之部」「表三階縁無目長押外窓廻り之部」「階下表廻り之部」「同所表窓下之腰板之部」「表庭廻り敷台勘定場之部」「正面下割場天井廻り打之部」「勘定場廻り天井之部」「全庭天井之部」「階上外廻り窓[]之部」「全階上内造作之部」「全正面并割之部」「正面二階天井之部」「参拾参通り式階無目之部」「全登り掛天井之部」「全三階天井之部」「三階縁側内之部」「三階縁側三方天井之部」「三階入側内床掛板之部」「全三階割場床根太之部」「三階正面チリヨケ高■(欄カ)之部」「表三階天井之部」「表階下段梯子之部」「舞台楽屋上段梯子之部」「表階上分三階へ段梯子之部」「表左右本家店柱之部」「全二階梁之部」「全二階柱之部」「全小屋之部」「表軒差キ化粧野地之部」「(裏軒差キ化粧野地之部)」全野々地之部」「全表大■之部」「本家店内造作之部」「表東テ本家店内造作之部」「本家店二階造作之部」「二階板掛板下根太掛板之部」「全本家二階造作之部」「全東店二階造作之部」「建具※貼りこみ」「表建具之部」「鉄金物之部」「平場小屋金物之部」「舞台小屋金物之部」「鉄柱之部」「二階棧敷金物之部」「石之部」「左官之部」「屋根板之部(貼り込み)家根板之部)」「屋根瓦之部※貼り込み」「工敷之部」	明治27年6月 (裏表紙)
弁天座劇場 明細書 第貳号	25.8×19.6	11丁	「土場上小屋木口」「左右軒廻りケシヨ之部」「左右棧敷浦柱之部」「棧敷両便所之部」「左右棧敷内造作之部」「左右棧敷天井之部」「平場床廻り之部」「平場天井之部」「二階左右棧敷内造作之部」「左右二階棧敷并廊下トモ天井廻り之部」「平場上左右窓廻り之部」	明治27年6月 (裏表紙)
弁天座劇場 明細書 第参号	25.7×19.5	8丁	「舞台廻り之部」「舞台小屋木口」「舞台楽家造作」「舞台二階造作之木口」「三階内造作之部」 ※この明細書の続きに、「辨天座表屋根修繕扣 仕様書 宗三計 四十二年五月吉日」(23.6cm×16.0cm)の冊子が合冊されている。	明治27年6月 (裏表紙)

凡例

- ① それぞれの明細書の概要と項目のみをまとめた。
- ② 明らかな誤字は修正したが、そのまま表記した箇所もある。
- ③ 判読不明な箇所については、■または[]とし、推測できる場合には()を付して補記した。



(図4)「第壹号 明細書」の裏表紙
関西大学なにわ大阪研究センター所蔵



(図3)「第壹号 明細書」(一丁表)
関西大学なにわ大阪研究センター所蔵

場屋根瓦」(八十壹坪)、「左右棧敷屋根瓦」(卅七坪七合)、「表屋根瓦」(三十八坪半)、「(舞台) 左右湯殿雪院(瓦)」(廿壹坪)、「本家并本店トモ瓦」(廿二坪半)、「高塀」(廿間半)とあるため、劇場の構造や規模が推測でき、舞台と観客席(平場・棧敷)をはじめ、舞台の左右に浴室と便所、本家・本店などをつくる計画であったことがわかる。

このほかに、明細書の末尾の「工敷之部」から、新築工事の人件費がわかる。建坪二八一坪で、大工は一坪につき十八人とし、のべ五〇五八人必要となり、一人につき四十銭が支払われることから、大工の手間賃として合計二〇三三円二十銭が計上されている。また、手伝いは一坪につき十人とし、のべ二八一〇人必要となり、一人につき二十八銭が支払われることから、手伝いの手間賃として合計七八六円八十銭が計上されている。

②「弁天座劇場 明細書 第貳号」

同書の本文の丁数は、表紙を除いて十一丁である。表紙に「辨天坐劇場 明細書」と書かれ、朱書きで「第貳号」とある。同書の裏表紙見返しに「二号 十一枚」「中村方」とあり、裏表紙に「明治貳拾七年六月 本家 尼野」と記されている。これらのことから、同書も、明治二十七年六月に作成され、儀右衛門が用いていたことが考えられる。

本文の内容は、主に棧敷や平場など観客席に関わるもので、「土場上小屋木口」「左右軒廻リケシヨ之部」「左右棧敷浦柱之部」「棧敷両便所之部」「左右棧敷内造作之部」「左右棧敷天井之部」「平場床廻リ之部」「平場天井之部」「二階左右棧敷内造作之部」「左右二階棧敷并廊下トモ天井

廻り之部」「平場上左右窓廻り之部」の十一の部門にわけて、工事に必要な木材とその材質、寸法、数量などが詳しく記されている。

③「弁天座劇場 明細書 第参号」

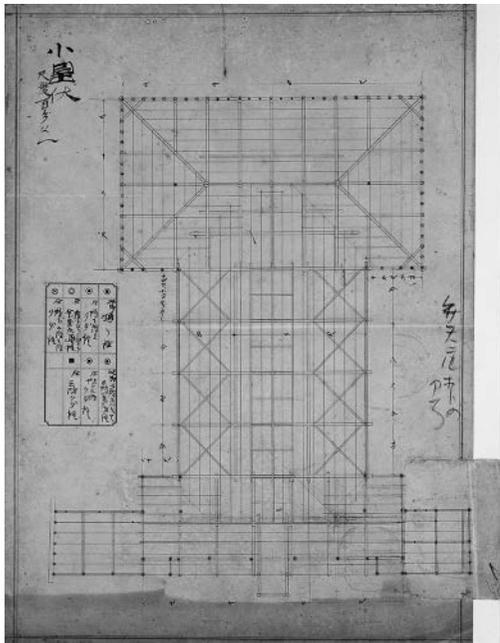
同書の本文の丁数は、表紙を除いて八丁である。表紙に「辨天座劇場明細書」と書かれ、朱書きで「第参号」とある。同書の裏表紙見返しに「三号 八枚」「大工方 中村所有」「中村方」とあり、裏表紙に「明治貳拾七年六月 本家 尼野」と記されている。これらのことから、同書は、明治二十七年六月に作成され、儀右衛門が所有するとともに、使用していた可能性が高い。本文の一丁表の冒頭に「舞台廻り之部」とあり、八丁裏まで、劇場の工事を実施するにあたって必要な木材とその材質、寸法、数量などが詳しく記載されている。

なお、この明細書に続いて「辨天座表屋根修繕扣 仕様書」と表題のある冊子が、合冊されている。本文の丁数は、表紙と裏表紙を除いて一丁である。表紙に「宗三計」「四十二年五月吉日」とあることから、明治四十二年（一九〇九）五月に儀右衛門の長男である宗三が作成し、のちに明細書の後ろに綴じたものであることがわかる。

以上のことから、三冊の明細書は、弁天座の建設に関わる材料とその材質・数量などを詳細に記したもので、明治二十七年五月に劇場が焼失した後、翌六月に作成され、儀右衛門が用いていたものであることが考えられる。また、裏表紙に「尼野」と記されていることから、弁天座の座主である尼野が明細書を共有していたことが推測できる。

これらの詳しい内容については、本文中の加筆修正を含めて、今後検討する必要があるが、各書の本文の項目を確認するだけでも、劇場の構造や規模を知ることができる。

弁天座の明細書のほかに、「中村儀右衛門資料」のなかには、「弁天座」と記した平面図（図5）や、弁天座に関わる建築図面も残っている。作成された時期は不明であるが、今後は、弁天座の明細書などと照合して、それらの図面の内容を明らかにする必要があるだろう。



（図5）弁天座図面「小屋伏 尺度百分之一」
関西大学なにわ大阪研究センター所蔵

おわりに

以上のように、弁天座は明治二十三年（一八九〇）と二十七年（一八九四）の二回にわたって建設工事が行なわれ、それらの詳細を記した新聞記事や「中村儀右衛門資料」などから、劇場がどのように建てられたのかを明らかにしようと試みた。

明治二十三年五月に改築開場した弁天座は、東京の歌舞伎座（明治二十二年十一月開場）を参考にして建設されたものであることがわかった。しかし、実際に落成した弁天座は、京都の祇園座と道頓堀の角座・中座・浪花座を折衷したような構造であったという。

そして、このとき改築された弁天座は、堅牢な上、劇場内の換気をよくするなど衛生面に配慮した構造であることも明らかにされた。こうした背景には、当時の劇場に関する法令「劇場取締規則」に従ったものと考えられる。しかし、この劇場は、明治二十七年五月六日に焼失してしまったことから、防火対策の面は十分でなかったようである。

焼失した弁天座は、ただちに再建の計画が進められ、その際に参考となったのが、東京の春木座（明治二十四年十二月開場）であった。

その後、弁天座の座主の尼野吉郎兵衛は、焼失して間もない五月中に、大工の中村儀右衛門に劇場の設計・建設を依頼したことが、儀右衛門の履歴書から判明した。

儀右衛門は、すでに、明治二十六年一月から、千日前の横井座の設計・建設を引き受けていることから、弁天座の座主も儀右衛門の大工としての技量を認めていたことが推測できる。

そして、この設計に際して作成されたのが、「明治貳拾七年六月」と記載のある「第壹号 明細書」「弁天座劇場 明細書 第貳号」「弁天座劇場 明細書 第参号」であったことが考えられる。

弁天座の再建工事は、設計の時点から、衛生面に配慮するだけでなく、劇場の東西を空地とすることや、防火壁も設けるなど、十分な防火対策が講じられた。その後、明治二十七年六月中旬から本格的に工事が進められることになり、劇場が完成して開場したのは同年十月のことであった。

弁天座の明治二十三年の改築工事および二十七年の新築工事は、東京の劇場を参考にしていたが、これらの劇場は、いずれも外観が洋風の建築であった。しかし、弁天座は、設計時の段階で、洋風ではなく、和風建築として計画されていた可能性が高く、こうした背景には、座主の意向が強く影響していることが推測できる。

これまでの研究でも、大阪の劇場街は、明治期以降も東京や京都に比べて変化が少なかったといわれており、特に演劇興行の中心地であった道頓堀は、劇場の外観・構造も伝統的な形をとどめていたことが指摘されている^②。もちろん、道頓堀でまったく洋風建築が取り入れられなかったわけではない。明治十七年（一八八四）の角の芝居（角の劇場）は洋風の建築に改築された^③。このとき参考になったのは東京の新富座であり、大阪の劇場建築が、東京の劇場の影響を受けていたことがわかっている^④。しかし、道頓堀に、本格的な洋風の劇場である松竹座が建設されるのは、大正十二年（一九二二）五月のことであった。

弁天座のように、東京の洋風建築の劇場を参考にしていたが、実際には和風建築であったことは、道頓堀の劇場建設とその過程を知る重要な

てがかりになると考える。今後は、大阪の劇場建設の実相を明らかにする上で、当時の新聞記事や、設計・建設に直接関わった中村儀右衛門のような大工の存在に注目し、調査・研究を進めていくことが必要である。

註

- ① 高谷伸『明治演劇史伝(上方篇)』(建設社、一九四四年)。
- ② 堂本寒星『増補改訂 上方演劇史』(春陽堂、一九四四年)。
- ③ 木村錦花『興行師の世界』(青蛙房、一九五七年)。
- ④ 近代の大阪の興行界の動向や各劇場の演目、劇場建設などについては、国立劇場近代歌舞伎年表編纂室編『近代歌舞伎年表 大阪篇』(全九巻十冊、八木書店、一九八六年～一九九五年)に詳しい。
- ⑤ 「大阪の劇場大工 中村儀右衛門資料」は、平成二十四年(二〇二二)、関西大学大阪都市遺産研究センター(現関西大学なにわ大阪研究センター)が収蔵し、総点数は四五五点におよぶ。この資料群の概要および資料目録、中村儀右衛門の主な経歴などについては、敷田貫・藤岡真衣「大阪都市遺産と道頓堀——大阪の劇場大工 中村儀右衛門資料の紹介をかねて——」(『大阪都市遺産研究』第三号、関西大学大阪都市遺産研究センター、二〇一三年三月)がある。
- ⑥ 『読売新聞』(明治九年一月十二日付)。
- ⑦ 『官許 大坂日報』(明治九年四月二十五日付)。明治九年四月十八日に起こった竹田の芝居の火事については、川崎溪雨「竹田芝居火事回顧」(『上方』第六十四号、創元社、一九三六年)に詳しく、この火事で多くの見物人が死傷したという。

⑧ 尼野吉郎兵衛については不明な点が多いが、小泉幾太郎編『日本之勝景一名帝国美観』(帝国地史編纂所、明治三十五年)の弁天座の項をみると、明治七年(一八七四)に父の遺業を継いで竹田の芝居を興行したとされ、二十八年(一八九五)に亡くなったとされる。のちの資料になるが、木村錦花『興行師の世界』(青蛙房、一九五七年)の「異色の尼野二代」の項に、つぎのように記されている。

「ぜげが安うて面白い」と唄われた竹田の芝居が弁天座と改称したのは、明治十一年の十月だった。その頃からの持主であったかどうか知らぬが、座主の尼野吉郎右衛門は蠟燭屋が本業である。此の人は他の座主や仕打とソリが合わず、全然売名を嫌って、黙々と地道の興行をしていたらしい。随って彼の名は番附以外に知られていない。

これによると、尼野は、蠟燭屋を本業としていたという。興行界に身を置いているが、「番附以外に知られていない」とも記されている。しかし、この本文にある弁天座の改称年代は「明治十一年の十月」と記されているが、実際には、明治九年十一月であり、「尼野吉郎右衛門」も吉郎兵衛の間違いであるなど、事実関係に誤りがある。

⑨ 演劇改良会は、政治家・文学者である末松謙澄(一八五五～一九二〇)が中心となり、明治十九年(一八八六)に東京で創立した。当時の会員は、福地源一郎、外山正一、依田学海などの識者をはじめとし、政界や財界の名士が加わっていた。この会の趣意は、これまでの演劇の弊風を改めること、そして脚本家の地位を向上させること、さらには、さまざまな演劇や音楽会などに対応できる新劇場を建設することであった。これは、歌舞伎の高尚化を進めるとともに、洋風の劇場を建設することなどを目的としていた。

⑩ 福地源一郎は、医師の福地荷庵の子として、長崎で生まれた。漢学・蘭

学などを学んだ後、幕府の使節の一員として渡欧し、明治期以降も政府の使節団にもなって洋行した。一八七四年に『東京日日新聞』に入社し、数多くの論説・記事を執筆した。演劇改良会に参加し、のちに歌舞伎の脚本も執筆するなど、劇作家としても活動した。

⑪ 高原弘造「歌舞伎座竣工報告」『建築雑誌』第三十二号、造家学会、明治二十二年八月）参照。

⑫ 歌舞伎座の構造については、伊原敏郎『明治演劇史』（早稲田大学出版部、一九三三年）参照。

⑬ 祇園座は、明治十八年（一八八五）十一月に新築開場した劇場である。『朝日新聞』（明治十八年十一月十日付）には、「御殿風の構造にて表二階の左右には翠簾^{みす}を垂れ軒には古風なる鉄製の燈籠八個を吊り」と記されている。同座については、日置貴之「京都・祇園座設立の経緯とその意義」（東京大学国語国文学会編『國語と國文學』第九十四巻、二〇一七年八月）に詳しい。

⑭ 『大阪毎日新聞』（明治二十三年五月二十三日付）。

⑮ 徳永高志『芝居小屋の二十世紀』（雄山閣出版、一九九九年）参照。

⑯ 国立劇場近代歌舞伎年表編纂室編『近代歌舞伎年表 大阪篇 第一巻』

（八木書店、一九八六年）、同編『近代歌舞伎年表 大阪篇 第二巻』（同、一九八七年）参照。

⑰ 『大阪毎日新聞』（明治二十七年五月十日付）。

⑱ 『大阪朝日新聞』（明治二十七年五月十一日付）。

⑲ 『大阪毎日新聞』（明治二十七年五月十四日付）、『大阪朝日新聞』（明治二十七年五月十五日付）。

⑳ 春木座については、文京ふるさと歴史館編『平成八年度特別展図録 郷座の時代——記憶のなかの劇場・映画館——』（文京区教育委員会、一九

九六年）参照。東京の本郷春木町にあった春木座は、もとは奥田座と称し、明治六年（一八七三）に開場した。春木座と改称した後、明治二十三年（一八九〇）六月に、近隣から出火した火事がもとで焼失したが、その後、建築家の河合浩蔵の設計により、二十四年（一八九二）十二月に新築開場した。煉瓦造三階建てで、外壁は石張りの洋風建築の劇場であった。しかし、この劇場も明治三十一年（一八九八）三月に、付近から出た火事で再び全焼し、三十二年七月に再建されて開場した。

⑳ 『大阪朝日新聞』（明治二十七年五月二十四日付）。

㉑ 尼野源二郎については、石上欽二編『尼野源二郎』（尼野源二郎記念志行会、一九二一年）参照。同書の「追懐」の項には、本田増次郎（米国文学博士）が記した「弁天座と尼野君」が掲載されている。源二郎は、明治二十五年十月に、大阪市南区玉屋町に分家している。弁天座の経営に関わった源二郎は、その後、明治三十四年から大正二年にかけて材木商を営み、その間、大正元年十二月に株式会社大阪ホテルを創立して専務取締役に就き、三年には大阪土地建物株式会社を創立して取締役となった。このほかにも、ホテル、水力電気株式会社、化学工業株式会社を創立するなど、多くの事業をてがけた。

㉒ 『大阪朝日新聞』（明治二十七年九月十九日付）。

㉓ 『大阪毎日新聞』（明治二十七年十月七日付）。

㉔ 早稲田大学坪内博士記念演劇博物館所蔵。資料番号〇一六一一九三二。同図は、早稲田大学文化資源データベースから閲覧することができる。

㉕ 槽については、服部幸雄『大いなる小屋 江戸歌舞伎の祝祭空間』（一九八六年初出、講談社、二〇一二年）参照。江戸時代、槽は幕府から興行の許可を得ている印であった。なお、明治十一年（一八七八）に開場した東京の新富座は、江戸時代の劇場様式や設備を見直して改革し、その際、槽

を取り外した。

- ②⑦ 尼野貴之は、明治九年（一八七六）、尼野吉郎兵衛の長男として、大阪市南区東槽町に生まれた。貴之については、小泉幾太郎編『日本の勝景 一名帝国美観』（帝国地史編纂所、一九〇二年）に中西利八編『財界フースヒー』（通俗経済社「財界フースヒー」刊行会、一九三二年）、河竹繁俊『日本の演劇』（東京堂、一九四二年）に詳しい。『財界フースヒー』によると、「父の歿後弁天座並に併せて一時角座の経営に当る当時劇場経営法の秩序なく内部の腐敗紊乱其極に達し居れるを慨し之が整理改造を断行し以て時流に適合せしめ面目を一新せり之が為め衰頽せし道頓堀各劇場漸次股賑に赴き斯道の開発に貢献する所多し」とある。

- ②⑧ 中村儀右衛門の履歴書と経歴については、前掲稿註⑤、拙稿「梅田の「大阪歌舞伎」——明治三十一年に開場した新築劇場——」（『大阪都市遺産研究』第三号、関西大学大阪市遺産研究センター、二〇一三年三月）、拙稿「明治期以降における大阪の劇場建設と大工・中村儀右衛門——履歴書をはかりとして——」（『関西大学なにわ大阪研究』第一号、二〇一九年三月）参照。

- ②⑨ 新修大阪府史編纂委員会編『新修 大阪府史 第六卷』（大阪市、一九九四年）参照。

- ③⑩ 国立劇場近代歌舞伎年表編纂室編『近代歌舞伎年表 大阪篇 第一卷』（八木書店、一九八六年）参照。

- ③⑪ 日置貴之『変貌する時代のなかの歌舞伎 幕末・明治期歌舞伎史』（笠間書院、二〇一六年）参照。この角の芝居の建設時には、大工が東京の新富座を実地に調査したという。

主な参考文献

- ・ 須田敦夫『日本劇場史の研究』（相模書房、一九五七年）
- ・ 山口廣一「明治以降の大阪劇壇」（『毎日放送文化双書十一 大阪の芸能』毎日放送、一九七三年）
- ・ 中村達太郎著、太田博太郎・稲垣栄三編『日本建築辞彙〔新訂〕』（中央公論美術出版、二〇一一年）
- ・ 『テーマ展 南木コレクションシリーズ』第十一回 瓦版にみる幕末大坂の事件史・災害史』（大阪城天守閣、二〇一二年）
- ・ 永井聡子『劇場の近代化——帝国劇場・築地小劇場・東京宝塚劇場——』（思文閣出版、二〇一四年）

〔付記〕二〇一六年四月の関西大学なにわ大阪研究センターの設置後、二〇一七年四月から二〇一八年三月まで同センターの非常勤研究員として在籍した。その間、「大阪の劇場大工 中村儀右衛門資料」の調査研究に従事し、その成果として本稿を執筆した。調査研究の便宜をはかっていた関西大学なにわ大阪研究センターのスタッフならびにセンター長杉本貴志教授に心より御礼を申し上げます。

また、資料の掲載を御許可いただいた早稲田大学坪内博士記念演劇博物館へ心より御礼を申し上げます。

